

港区立郷土歴史館

歴史館だより

外国御用出役・江幡吉平 —東禅寺事件で散った幕臣—

岡谷 成康
(学芸員)

明治35(1902)年に日英同盟が締結されてから、令和4(2022)年は120周年となります。現在の日英関係は良好ですが、幕末期には、英国公使館であった東禅寺が水戸浪士たちに襲撃された「東禅寺事件」が起こるなど、不穏な空気が漂っていました。

今回は、令和2年度港区指定文化財の一つである「東禅寺事件銀製メダル及び江幡家文書」を語るうえで最も重要な江幡吉平という人物について紹介します。この資料は、栃木県にお住いで、江幡家の子孫にあたる方からご寄贈頂いたものです(資料については『歴史館だより Vol.06-2』参照)。

事件当日に幕府の外国御用出役として東禅寺を警護していた江幡は、襲撃者と戦い、警護者の中では、唯一の戦死者となってしまいます。

英国政府は公使を守るために戦った人々へメダルの贈呈を企図します。しかし、当時は西洋諸国との外交は非常にデリケートな問題であったため、メダルの授与は叶わず、明治22(1889)年になってメダルが授与されることとなり、江幡のメダルは、遺族の江幡きくが受け取ったのでした。

江幡のメダルを授与する際、日本政府は彼の履歴を必要としたのでしょう。日本政府作成の「太政類典」(国立公文書館蔵)には、江幡の履歴書が含まれています。また、江幡家文書の中には、江幡家の「由緒書」や江幡の事歴を記した文書もあります。

これらによれば、江幡は、天保2(1831)年に江戸下谷三味線堀の下野国烏山藩大久保家屋敷内で留守居役の磯部善右衛門の次男として誕生。母は三上右近(越前国出身、江戸で医業を営む)の妹でした。

幼少期から武芸を好み、丁年(21歳のこと)になった頃には撃剣・槍術の免許皆伝を受けるほどでした。22、3歳の頃に友成郷右衛門という人物に弟子入りして砲術を学び始め、数年のうちに上達し、烏山藩主からも高く評価されました。

その頃、同門で幕臣の吉村某と義兄弟になり、

吉村姓を名乗るようになります(それまで磯部鐘蔵と称した)。これは、幕府の講武所で武術を講習するためだったといえます。講武所への出入りは幕臣の子弟に限られたので、幕臣の姓を名乗ったのです。この後、彼は講武所出役に推挙されました。

万延元(1860)年4月27日、幕臣の江幡吉左衛門の娘と婚姻し、養子となって、名を江幡吉平と改めました。養父は江幡の人となりを好み、養子とすることを望んだとされます。同年10月10日には外国奉行支配手付出役となり、外国人の警護のため、品川波止場に勤務しました。文久元(1861)年5月18日には外国御用出役に転じ、同24日に英国公使館警護のため、東禅寺に配属されました。そしてその4日後の28日夜、東禅寺事件に遭遇、31歳でその生涯を終えたのです。

典拠となる資料からは、武勇に優れ、砲術にも通じ、人となりも良いという、江幡の人物像を見て取れます。また、江幡家の「由緒書」には、事件当日に江幡が「抜群相働」いたとあります。

この人物像は、やや強調・誇張があると考えられますが、それでも東禅寺事件の背景を知るうえで非常に興味深いものです。

江幡家文書には以上の他、江幡きくへ銀製メダルが授与される経緯、江幡を顕彰する運動の様子を知ることができる文書があります。紙幅の関係上、今回は省きますが、またいずれ機会を設けて紹介したいと考えています。



江幡家の由緒書(当館蔵)



港区立郷土歴史館

歴史館だより

用の美 — 収蔵庫から —

鈴木 真弓
(学芸員)

港 区立郷土歴史館には現在、港区内外から寄贈を受けた約1万点ほどの暮らしにかかわる生活道具が収蔵されています。大半は転居などをきっかけに寄贈されたものですから、新しいものから古いものまで多種多様です。これらの道具を調べると、その技術だけでなく人の生活や文化、社会の変化までわかることがあります。

暮らしの歴史を学ぶために、区内の小学校3年生が社会科見学で当館を訪れます。今期は食と住に焦点を当て、住では炭を利用した暖房具から現代のストーブまでを紹介しました。移り変わりを簡潔に説明しようとするどうしても紹介することを断念せざるをえないものができます。そこでその中から一つ魅力的な道具をご紹介します。

下の写真はなんだかおわかりになりますか？



大きさは口径27cm、高さ24cm、胴囲95cm。陶器製で共蓋（本体と同質でお揃いの蓋）が付いています。全体に浮彫りした幾何学模様が施され、所々に梅の花が線彫りされています。

これは行火です。行火は手足をあたためるために用いられた持ち運びのできる道具です。土製の火容に蓋をかぶせた簡単なものや、木や土で箱状を作り、その中に火容を置き、熱源である炭火を置いたものなどが一般的です。近代にはもっぱらこの作りで、前面だけをあげ他の面は三日月形などの透かし窓が設けられています（右の写真）。

熱が集中する天部は二重になっていて空気の層ができる仕組みで、通気のための穴が小さく開いています。そしてこの上から布団をかけてあ



たまります。当館にも多く収蔵されています。

先に紹介した行火は火鉢の形状をしていますが、なによりこの共蓋に特徴があります。蓋は円盤状になっていて中が空洞です。熱さが直接くことを避け、あたたかな空気の層を作るという前述した構造です。上部に開いた二つの穴からはその暖気がゆとりと放出される仕組みでしょう。また指で挟んで開閉できるのも便利だと考えられます。そして本体上部にも穴が四方向にきれいに開いています。持ち運びのためとは考えにくい大きさですから通気穴です。さらに装飾と思われた浮彫り模様にも仕掛けがあって、模様に触れた直後、彫られた下地からもう少し熱いあたたかさがじわりとやってくるという効果です。製作年は不明ですが、機能性を高めた粋な暖房具の一例です。

しかし昭和30年代頃、ガスや石油、電気の普及によってこのような暖房具は姿を消していきます。それはつまり炭もまた日常生活道具から消えていくことを意味しましたが、茶道という伝統文化の中で重要な役割を担っていきます。

右の写真は炭の断面です。菊の花のように見えるので茶道では「菊炭」と愛称されています。これも寄贈された道具の中にありました。



もちろんお湯を沸かすための熱源としての炭です。茶道には寸法や形の違う炭が十種類ほどあって、それらを組み合わせると炉の中に順番通りにつぎます（置きます）。釜の水を美味しく、抹茶を点てるのにちょうどよい頃に沸かすことが一番の目的で配置します。火が廻る前にその配置を皆で観賞する点前もあるほどです。ですから炭を作る職人は、ただ湯を沸かすという実用の枠を超えた芸術性の高い炭を生みだしていくことになっていきました。

炭は現在、キャンプや飲食店などでその火力を披露していますが、茶道の世界では洗練された炭の魅力を見ることができます。